

徒然草必携

久保田淳・編



● 學燈社

徒然草必携

迎里國大(・)・(・)張

東京府豊島区
三軒三丁目一丁目

發行所
金澤市
燈學社

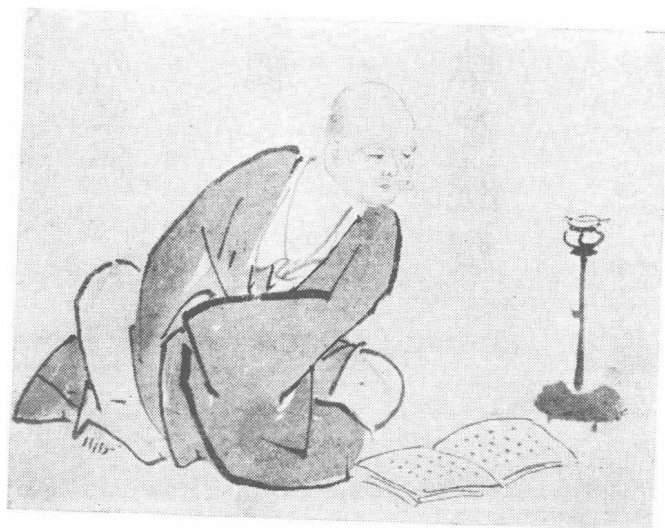
東京府豊島区
三軒三丁目一丁目
九一五〇

印刷所
大盛印刷株式會社

發行所
石井時司

編輯者
久保田淳

一九九〇年三月一日
二版發行



久保田淳編

徒然草必携

徒然草とその時代

久保田 淳

7

徒然草の文体

三木 紀人

12

兼好の顔

稲田 利徳

21

目次 ●●●

徒然草を読む

久保田 淳

35

*

*

序段 ³⁶ つれづれなるま	第四十一段 ⁵⁶ 五月五日	第八十二段 ⁷¹ うすもの	第二百一十三段 ⁸⁵ 無益のこ	第六十四段 ⁹⁹ 世の人あ	第二百五段 ¹¹¹ 比叡山に大師
第一段 ³⁷ いでや此世に	第四十二段 ⁵⁶ 唐橋中將	第八十三段 ⁷¹ 竹林院入	第二百一十四段 ⁸⁵ 是法々師	第六十五段 ¹⁰⁰ あづまの	第二百六段 ¹¹¹ 徳大寺右大臣
第二段 ³⁸ いにしへのひ	第四十三段 ⁵⁶ 春の暮つ	第八十四段 ⁷¹ 法顯三藏	第二百一十五段 ⁸⁵ 人にをく	第六十六段 ¹⁰⁰ 人間のい	第二百七段 ¹¹² 龜山殿たてら
第三段 ³⁹ 万にいみじく	第四十四段 ⁵⁷ あやしの	第八十五段 ⁷² 人のこゝ	第二百一十六段 ⁸⁶ ばくちの	第六十七段 ¹⁰⁰ 一道に携	第二百八段 ¹¹² 經文などの紐
第四段 ³⁹ 後の世の事心	第四十五段 ⁵⁷ 公世の二	第八十六段 ⁷² 惟繼中納	第二百一十七段 ⁸⁶ あらため	第六十八段 ¹⁰⁰ 老たる	第二百九段 ¹¹² 人の田を論ず
第五段 ³⁹ 不幸に愁にし	第四十六段 ⁵⁷ 柳原の辺	第八十七段 ⁷² 下部に酒	第二百一十八段 ⁸⁷ 雅房大納	第六十九段 ¹⁰¹ 何事の式	第二百十段 ¹¹³ 喚子鳥は春の
第六段 ³⁹ わが身のやん	第四十七段 ⁵⁷ 或人清水	第八十八段 ⁷³ 或者小野	第二百一十九段 ⁸⁷ 顔回は志	第七十段 ¹⁰¹ さしたる事	第二百十一段 ¹¹³ 万の事はた
第七段 ³⁹ あだし野の露	第四十八段 ⁵⁸ 光親卿院	第八十九段 ⁷³ 奥山に猫	第二百二十段 ⁸⁷ 物にあらそ	第七十一段 ¹⁰² 貝をおほ	第二百十二段 ¹¹³ 秋の月ほか
第八段 ⁴⁰ 世の人の心ま	第四十九段 ⁵⁸ 老来て始	第九十段 ⁷³ 大納言法印	第二百三十一段 ⁸⁷ まづしき	第七十二段 ¹⁰² わかき時	第二百十三段 ¹¹⁴ 御前の火炉
第九段 ⁴⁰ 女は髪のため	第五十段 ⁵⁸ 応長の比伊	第九十一段 ⁷³ 赤舌日と	第二百三十二段 ⁸⁷ 鳥羽の作	第七十三段 ¹⁰² 小野小町	第二百十四段 ¹¹⁴ 想夫恋とい

第十段41家居のつきづ	第五十一段50龜山殿の	第九十二段74或人弓い	第二百三十三段88夜のおと	第二百七十四段103小鷹によ	第二百十五段114平宣時朝臣
第十一段41神无月の比	第五十二段51仁和寺に	第九十三段74牛を売者	第二百三十四段88高倉院の	第二百七十五段103世には心	第二百十六段115最明寺入道
第十二段41おなじ心な	第五十三段51是も仁和	第九十四段74常樂井相	第二百三十五段88資季大納	第二百七十六段103黒戸は小	第二百十七段115或大福長者
第十三段42ひとり灯の	第五十四段50御室にい	第九十五段75箱のくり	第二百三十六段88くすしあ	第二百七十七段104鎌倉中書	第二百十八段115狐は人にく
第十四段42和歌こそな	第五十五段50家の作り	第九十六段76めなもみ	第二百三十七段88花はさか	第二百七十八段104或所のさ	第二百十九段115四条黄門命
第十五段43いづくにも	第五十六段51久しくへ	第九十七段76其物につ	第二百三十八段88祭過ぬれ	第二百七十九段104入宋の沙	第二百二十段115何事も辺土
第十六段43神楽こそな	第五十七段51人のかた	第九十八段77たうとき	第二百三十九段88家に有た	第二百八十段104さぎちやう	第二百二十一一段116建治・弘
第十七段44山寺にかき	第五十八段52道心あら	第九十九段77久我相国は殿	第二百四十段88身死して財	第二百八十一一段105ふれく	第二百二十二段116谷栗顯
第十八段44人はをのれ	第五十九段52眞乘院に盛	第一百一段77或人任大臣	第二百四十一一段88悲田院亮	第二百八十二段106四条大納	第二百二十三段116たづのお
第十九段45折節のうつ	第六十段52眞乘院に盛	第一百一段77或人任大臣	第二百四十二段88心なしと	第二百八十三段106人つく牛	第二百二十四段116陰陽師有
第二十段46ながしと	第六十一一段52眞乘院の	第一百一段77大納言光	第二百四十三段88人の終焉	第二百八十四段106相模守時	第二百二十五段117多久助が
第二十一一段47万のこと	第六十二段52延政門院	第一百一段77大納言光	第二百四十四段88梅尾の上	第二百八十五段106城陸奥守	第二百二十六段117後鳥羽院
第二十二段47なに事も	第六十三段53後七日の	第一百一段77大納言光	第二百四十五段88御隨身秦	第二百八十六段106吉田と申	第二百二十七段117六礼礼讚
第二十三段48おとろへ	第六十四段53車五緒	第一百一段77大納言光	第二百四十六段88明雲座主	第二百八十七段106万の道の	第二百二十八段117千本の釈
第二十四段48齋王の野	第六十五段53この比の	第一百一段77大納言光	第二百四十七段88四十以後	第二百八十八段106或者子を	第二百二十九段118五条内裏に
第二十五段49飛鳥川の	第六十六段53岡本関白	第一百一段77大納言光	第二百四十八段88鹿茸を鼻	第二百八十九段107今日は其	第二百三十段118そくの別
第二十六段50風も吹あ	第六十七段54賀茂の岩	第一百一段77大納言光	第二百四十九段88龍能をつかん	第二百九十段107妻といふ物	第二百三十一一段118その別
第二十七段50御国ゆづ	第六十八段54筑紫にな	第一百一段77大納言光	第二百五十段88龍能をつかん	第二百九十一一段108夜に入て	第二百三十二一段118すべて人
第二十八段51諒闇の年	第六十九段54書写の上	第一百一段77大納言光	第二百五十一一段88或人の云	第二百九十二段108神仏にも	第二百三十三段118万のとが
第二十九段51しづかに	第七十段54元応の清著	第一百一段77大納言光	第二百五十二段88西大寺靜	第二百九十三段108くらき人	第二百三十四段118人の物を
第三十段52人のなきあ	第七十一一段54名を聞よ	第一百一段77大納言光	第二百五十三段88兼大納	第二百九十四段108達人の人	第二百三十五段118ぬし有家
第三十一一段53雪のおも	第七十二段54賤げなる	第一百一段77大納言光	第二百五十四段88此人東寺	第二百九十五段108或人久我	第二百三十六段118丹波に出
第三十二段53九月廿日	第七十三段54世にかた	第一百一段77大納言光	第二百五十五段88世にした	第二百九十六段108東大寺の	第二百三十七段118柳宮にす
第三十三段53今の内裏	第七十四段54蟻のごと	第一百一段77大納言光	第二百五十六段88大臣の大	第二百九十七段108諸寺の僧	第二百三十八段118御隨身近
第三十四段54甲香はほ	第七十五段54つれく	第一百一段77大納言光	第二百五十七段88筆をとれ	第二百九十八段108揚名介に	第二百三十九段118八月十五
第三十五段54手のわろ	第七十六段54世の覚え	第一百一段77大納言光	第二百五十八段88益のそこ	第二百九十九段108横川行宣	第二百四十段118しのぶの浦
第三十六段54久しくを	第七十七段54世中にそ	第一百一段77大納言光	第二百五十九段88みなむす	第二百十段108退凡下乗の	第二百四十一一段118望月のま
第三十七段55朝夕へだ	第七十八段54いまやう	第一百一段77大納言光	第二百六十段88門に額かく	第二百十一一段108花のさか	第二百四十二一段118としな
第三十八段55名利につ	第七十九段54何事も入	第一百一段77大納言光	第二百六十一一段88遍昭寺の	第二百十二段108十月を神无	第二百四十三段118になり
第三十九段55或人法然	第八十段54人ごとに我	第一百一段77大納言光	第二百六十二段88太衡の太	第二百十三段108勸勤の所に	
第四十段55因幡國に何	第八十一一段54屏風障子	第一百一段77大納言光		第二百十四段108犯人を告に	

徒然草事典

編・久保田 淳

123

浅見 和彦
木下 資一
久保田 淳
小島 孝之
三角 洋一

花月 124
文 126
和歌 128
糸竹 130
夜 132
すまひ 134
食 136
酒 138
色 140
医 142

*

無常 144
名利 146
仏法僧 148
友 150
道 152
神 154
九重 156
いにしへ 158
政事 160
唐土 162

*

心に残る徒然草の言葉〔付現代語訳〕

191

■現代の眼から（再録）

兼好と長明と（抄）

佐藤 春夫

166

徒然草

小林 秀雄

169

徒然草私感（抄）

武者小路実篤

170

兼好（抄）

唐木 順三

174

「つれづれ草」文学の世界（抄）

西尾 実

177

たくましい無常観（抄）

本多 顕彰

181

徒然草と現代（抄）

荒 正人

182

「玉の盃」——『徒然草』

中村真一郎

184

兼好と時間（抄）

上田三四二

186

■徒然草・兼好を追って

徒然草の本

桑原 博史

198

研究と鑑賞の軌跡

山岸 奉子

204

徒然草の文法

山口 明穂

212

徒然草のテキスト十二選

164

兼好秀歌十首

229

■系図・年表・地図

徒然草関係系図

久保田 淳

218

徒然草・兼好年表

同

221

徒然草文学地理

藤田百合子

225

あとがき

230

徒然草とその時代

鎌倉時代の文学見取図を兼ねて

久保田淳

一

「徒然草とその時代」というテーマを、やや巨視的に、自らの掉尾に徒然草を生み出した、鎌倉時代なる一時期とその文学の特性を考えるというふうに敢えて拡大解釈することによって、この冊子の糸口としたい。それというのも、徒然草そのものに即した考察は、以下の諸篇において、さまざまな角度から具体的になされるであろうと期待するからである。さらにまた、徒然草を最初から中世文学の山脈中に屹立した高峰として、そこにだけ焦点を合せるのではなく、一旦は高低さまざまな峰の群立つ山脈全体の中において遠望するのも、あなたがち無駄ではなからうと考えるからである。

二

ロンドンやパリは、いうまでもなくイギリスやフランスの首都で、それぞれの国の政治・経済、そして文化の中心地である。それらに対して、アメリカでは、政治の中核たる首都はワシントンであるが、アメリカのみならず全世界の経済や文化の中心はニューヨークであるという具合に、この国では一国の中心が二つ存在している。また、ドイツ連邦共和国（西ドイツ）の首都はボンであるが、

これは都会としては小さな一地方都市で、経済や文化の中心地であるとはいえない。この国ではそれらの中心地を一つの都会に求め難いようである。

なぜこのような常識的なことを改めて確かめるかというと、日本の中世という時代は、都市のあり方という形の上では、ちよっと現代の西ドイツのようでもあり、またアメリカのような所もあるからである。

日本の歴史を通観すると、大体多くの時代とも政治・経済の中心地と文化の中心地は一致していて、それは都であるということになってきている。大和時代は都そのものの規模が小さいのでさて置くとしても、奈良時代における平城京、平安時代における平安京―京の都がそうであった。そして、明治以降現代に至るまでの東京がそうである。

では、江戸時代はどうかというと、この時代には中心地が三つある。それは江戸・京・大坂の三つの都会であって、これらはしばしば三都と呼ばれている。三都はそれぞれ性格を異にしていって、一応、江戸は將軍の都で政治の中心地、京は九重の都、天子の都で旧い權威の中心地、大坂は商人の町で天下の台所といわれるように経済の中心地と見られる。が、それぞれの都市がそれぞれの、ニュー

ンスを異にした文化を持っている、文化が多極化している。しかし、やや仔細に見れば、当然江戸三百年は一樣ではありえず、前期から後期にかけて、文化東漸という現象が起こっている。江戸へ江戸へと草木も靡くようになってくる。人々も皆江戸を目指して集まってくる。そうして、三都の中で江戸の都だけが次第に政治のみならず、経済・文化の中心地となつてゆき、明治維新を待たず、江戸が今日の東京のような性格を持つに至る。

江戸時代後期—近世後期は、このようにして日本の歴史において、王朝—平安時代以来久方ぶりに、政治・経済の中心地と文化の中心地が一致して、事実上の首都と目される都会にすべてが集中していった時期、世界的に見れば、大江戸がロンドンやパリに近いものに成長していった時期である。

それに対して、奈良時代、平安時代と、都それ自体は変遷しても、すべてのものが都に集中していった時代から、政治・経済の中心地と文化の中心地とが分裂した時代——これが鎌倉時代である。

そしてまた、一旦はそれらの中心地が再び京の都に集中するかに見えたが、実質的には日本全国に分散され、いわば後の江戸時代のような形態の素地を作ったのが、それに続く室町時代である。

であるから、きわめておおまかな言い方をすれば、奈良・平安時代は、都中心の時代—中央集権の時代、江戸後期から現代までも、大体において一都會中心の時代—中央志向の強い時代といえるであろう。それらに対して、鎌倉、室町、江戸前期は、実質的には都中心ではない、分裂・分散の時代といえることができる。

鎌倉時代とは、いうまでもなく鎌倉の地に鎌倉幕府が置かれていた時期の謂いである。それは建久三年（一一九二）源頼朝が征夷大將軍とされて幕府が正式に始まった時から、元弘三年（一一三三）

北条氏一族が滅亡して、それとともに幕府も滅びた時まで百四十年余り、ざっと一世紀半を指す。その間、日本国は四度の大きな戦乱を経験している。すなわち、

承久三年（一二二一）の承久の乱

文永十一年（一二七四）の文永の役

弘安四年（一二八一）の弘安の役

元弘元—三年（一一三三—一一三三）の元弘の変

である。文永・弘安の役は元寇として知られる外寇であるが、他は内乱である。これらの他に、元弘の変の前哨戦というか、一連の南北朝動乱の序曲とも見られるものが、正中元年（一二三四）の正中の変である。このように見ると、鎌倉時代はまさに戦乱の世の中であるが、これから南北朝、室町、安土桃山と下ってゆくと、いよいよ内乱状態がいわば日常的になってゆくわけで、結局中世全体が内乱の時代であったといえる。

これらの戦乱がすべて同じ意味を持っているとはいえない。それが以後の歴史に影を落していることはいうまでもないが、日本の文学・文化の歴史に最も深い影響を与えたのは、承久の乱である。実に、この内乱が今まで述べてきた、政治・経済の中心と文化の中心との分裂を決定的にしたのである。分裂の素地は、頼朝が鎌倉の地に幕府を開いた時点で播かれた。が、それを決定的にしたのが、後鳥羽上皇と北条義時—京方と鎌倉方が戦って、鎌倉方が京方を破り、帝王—後鳥羽・土御門・順徳の三上皇が臣下によつて遠流されるという、未曾有の事態が生じた承久の乱だったのである。このことは鎌倉時代の文学や文化を論ずる際に、まず第一に念頭に置くべき事柄であると考ええる。

三

鎌倉時代の主要な文学作品としてはどのようなものがあるであろうか。主要なものという認定は主観に左右される要素が少ないとはいえず、その選定は案外難しいが、たとえば次のようなことになるであろうか。

元久2 (一二〇五)

新古今和歌集

建暦2 (一二二二)

方丈記

建保元 (一二二三)

金槐和歌集

承久2 (一二三〇)

愚管抄

貞応2 (一二三三)

海道記

？

宇治拾遺物語

？

平家物語

建長4 (一二五二)

十訓抄

建長6 (一二五四)

古今著聞集

弘安3 (一二八〇)

十六夜日記

弘安6 (一二八三)

沙石集

正和元 (一二三二)

玉葉和歌集

とはすがたり

元弘元 (一二三二)

徒然草

これらの作品を見ると、明らかに東国、関東出身の作者の手に成るものは、僅かに一点しかないことに気付くであろう。すなわち、鎌倉右大臣源実朝の家集『金槐和歌集』、この一作品のみで、他はいずれも京の都人の手に成るものである。これらのうち、『海道記』『宇治拾遺物語』『平家物語』『十訓抄』等の作者は必ずしも明らかではないが、少なくとも東国出身でないことは確かである。強い

ていえば、『沙石集』の編者無住は梶原氏の子孫と考えられているので、彼の場合は関東にゆかりがありそうであるが、関東出身者と見なすことはできない。鎌倉時代における文化の中心、従ってまた文学の中心は依然として京の都にあったということが、この単純な事実だけでも一目瞭然とする。

しかしながら、やや仔細に見ると、これらの作品乃至は作家のいずれにも、関東乃至は鎌倉の影がさしていることに気付くであろう。

まず、最も王朝文学的色彩の豊かな『新古今和歌集』はどうか。ここにも鎌倉は影を落している。すなわち、他ならぬ鎌倉の主、頼朝の歌が二首採られているのである（露旅九七五と雑下 一七八五）。これらの歌がどのような史的背景の下に詠まれた作であるかについては、かつて論じたことがあるので（拙著『新古今和歌集全評釈』第四卷、第八巻）、ここでは改めて繰返さない。が、ともに鎌倉の主たる頼朝の、京に対する微妙な姿勢を想像することによって理解の深まる作であるということだけは言っておきたい。実朝が歌を詠み始めたのは、父のこれらの作が入集している『新古今集』に触れたのがきっかけであったと考えられるのである。

藤原定家は『新古今集』の五人の撰者の中でも、関東にゆかりのある人であった。彼は右の実朝の歌の師範であり、またその男為家の妻は、関東の豪族宇都宮頼綱、入道蓮生の女であった。その蓮生の依頼で撰んだものが『小倉山荘色紙和歌』——『小倉百人一首』の原形であることは、改めて言うを要しないであろう。しかし、撰者の中で最も関東と密接な交渉を持っていた人物がいる。それは藤原（飛鳥井）雅経である。彼の室は幕府の要人大江広元の女であった。そして雅経自身、後鳥羽天皇に見出される前は鎌倉に下っていて、

家職である蹴鞠の道をもって頼朝に仕え、大層目を掛けられていた人物なのである。

この雅経に伴われて新都鎌倉に下った経験もあるのが、鴨長明であった。『方丈記』には関東下向のことは全く記されていない。しかし、実はこの作品を書く前の年、長明は鎌倉に下り、頼朝の墓前で歌を詠じている。また、その編になる『発心集』には、関東での見聞の反映ではないかと想像される、入間川の洪水の時の話が録されているのである。

前に言及した、頼朝の一七八五番の歌の詞書からも知られるように、慈円は頼朝と親交があった。『愚管抄』は、この末世末法の世の中では、文―政治は京の都の天皇と摂関家が、武―軍事は鎌倉の将軍が、それぞれ統括するのが道理に叶ったあり方なのだと、現実を認識した上で、政治と軍事の分割支配を歴史的必然であると説くことによって、後鳥羽院の承久の企てを諫止しようとした警世の書だったのである。ゆえに『愚管抄』は、本来文学作品ではないけれども、鎌倉時代それ自体やその時代の文化・文学のありようを考える際に、やはり見過せない作品である。

『海道記』『東関紀行』『十六夜日記』、そして『とはすがたり』など一連の紀行文学―これらこそはきわめて分裂の時代にふさわしい作品であって、いずれも京の都と鎌倉との間の旅を描き、新興都市としての鎌倉の殷賑を極めていた有様を写し出している。一方、軍記物語や説話集が関東の武人や庶民の生態を活写していることも、いうまでもないであろう。

鎌倉時代の主要作品・作家を辿ってきて、ようやく、徒然草、兼好に至った。

兼好は徒然草の筆を執る前に、「武威国金沢といふ浦」(三四段)

に下っている。金沢文庫には兼好の書状も現存する。関東の住人との際もあった(二三四段)。

徒然草には、当然濃淡の差はあるが、関東の影がそこに認められる。ここにそれらの章段を書き出してみると、ほぼ次のようなことになるであろう。

- 一九段 折節の移りかはるこそ
- 三四段 甲香はほら貝のやうなるが
- 一一五段 宿河原といふところにて
- 一一九段 鎌倉の海に
- 一四一段 悲田院堯蓮上人は
- 一四二段 心なしと見ゆる者も
- 一五三段 為兼大納言入道
- 一六五段 あづまの人の
- 一七七段 鎌倉中書王にて
- 一八四段 相模守時頼の母は
- 一八五段 城陸奥守泰盛は
- 二一五段 平宣時朝臣
- 二二六段 最明寺入道
- 二三四段 陰陽師有宗入道

これらのうち、最も注目すべきものは、一四一段での、自身東国入である堯蓮上人による東西日本人気質の優劣比較論であろう。一一五・一七七・一八四・一八五・二二五・二二六の各段は、いずれも関東の人々に関する説話的章段であるが、それらを通じて兼好が関東人士をどのように見、あるいは考えていたかを探ることは、不可能ではないに違いない。一九・三四・一一九などの各段は、習俗や言葉に関するものであるが、それらも暗示的でないとはいえない

い。

ともかく、これらの諸段の存在を考えれば、兼好が徒然草を書き継ぐ間、関東が全く意識外に置かれることはほとんどなかったであろうと想像されるのである。

これらの作品の他、中世文学ということであれば、当然法語の類、それから早歌などの歌謡も考えられなければならない。それらのいづれにも関東の影は濃いといえる。法語を語った祖師達のうち、日蓮は関東、安房国の人であったし、早歌は関東武士が主な享受者であったと見られる。また、西日本出身の明恵のごとき人も、承久の乱を契機として、関東人の代表者ともいえる北条泰時やその部下と深く関わりあったのである（『明恵上人歌集』『桐尾明恵上人伝記』他）。

このように見ると、鎌倉の地はそれ自体文学を生み育てる豊かな土壌であったとはいえない。にもかかわらず、徒然草などをその一つの典型として、この時代の文学はやはり鎌倉の影を抜きにして語ることはできないのである。

四

今まで概観してきた鎌倉時代の文学を通じて、ある種の傾向が認められるであろうか。ジャンルを異にし、形態を異にするこれらさまざまな作品、階層、思考形式において異なる作者に共通の、ある一つの傾向を探ることは、さほど容易なことではない。

が、一口に言えば、きわめてありふれた言葉ではあるが、この時代の文学作品は、そしてまた作家は、一種の「強さ」を持っているといつてよいと思う。どれもが底にある強さを秘めている。それはしばしば優艶とか妖艶とか評される『新古今集』にも、また女性の

手に成った『十六夜日記』や『とはずがたり』にも、確かに潜んでいる。その強さは、言い換えれば「ことわり」であり、「道理」とも呼ばれるものであろう。男性的傾向といつても、また素朴さ、骨太さと置き換えてもよいかもしれない。

この「強さ」は必ずしも文学作品としてすぐれた点であるとはばかりは言い切れないと考える。少なくとも、この時代の作家自身は、たとえば藤原定家やこれから問題にする兼好のような、きわめて自覚的な作家は、それをむしろ前代の王朝文学のやさしさ、女性的、技巧的傾向、繊細さに対して、劣っている点であると認識していたと思う。自分達の時代そのものが劣っている、末代である。しかし、それが自分達の置かれた現実なのだと思ひながら、自らの作品を紡ぎ出していたのであると考える。

しかしまた、感情の抑制がきかないところに生ずる暴力的な強さはあっても、意志的な強さは乏しい現代人の目から見ると、そのような意志に裏打ちされた強さ、乃至は「ことわり」を一つの文学理念としている、または結果的にそうなってしまうている、この時代の文学が暗示する点も大きいことは事実である。徒然草や法語の類が今日の読書人に新鮮な感銘を与える理由は、そのようなところにも潜んでいるのではないであらうか。

私自身は、文学史的なサイクルの上では、中世を古代前期、上代との関連において見直してもよいと考えているのであるが、一方、文学と風土という観点からは、そのような強さを秘めた文学・文化の時代を、直接はくくまないまでも、導き出した、鎌倉を中心とする関東という土地の持つ意味を、もっともつと京都との相関関係において考察すべきではないか、言ってみれば、徒然草一四一段の堯蓮上人のような視点を確立すべきではないかと思うのである。

徒然草の文体

——いくつかの段をめぐって

序段

いつとなく作品の概要を知ってしまっているわれわれにとって、想定しにくいことではあるが、何らの予備知識なしに徒然草を第一頁から読みはじめたなら、どんな予感を持つだろうか。

つれ／＼なるまゝに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

誰もが、いわくありげな、なじみのない序文であると感じよう。修辭をこらして莊重に語りおこしたり、卑下をまじえつつ、使命感など各種の内的衝迫の切実さをほめかすのが通行の序文のあり方だが、ここにはそのようなものは見られない。あるのは、これ以上切りつめれば序の体をなさない短い文章、その中に連鎖される消極的な語群である。

あまりのとりとめなさに、たちまち読む意欲を失うのが自然な反応かもしれない。が、この一見不謹慎な起筆の仕方に不思議な感興を覚えて、思わず膝をのりだす人も少なくなかろう（知られる限りでの徒然草の最初の読者は百年後の正徹だが、彼はそんな風にしてこの作品と出会ったかと思われる）。自己の営為を戯画化したかに

三木紀人

見えるこの文章は、読み方を改めれば、既成の文字観への不敵な挑戦をほめかすもののようでもあるからである。「よしなし事」を「そこはかとなく」書いた「つれ／＼」の所産といえば、不毛なものにすぎない。にもかかわらず、読者を招くに足るものがそこにあるとすれば、そのようなものを書こうとすることは、文学史における処女地帯に足を踏み入れようとする行為になるだろう。

それが有意義な結果をもたらせば、この序文は実に新鮮な試みの要約としてふりかえられようし、失敗に終れば、巧みな逃げ口上として機能しよう。成否いずれにしても、それなりの表現効果は持つことになる。これは、無造作な外見の中に、乱世を巧みに生き抜いた者の筆らしい、用心が秘められている文章なのであろう。

柳原の辺に、強盜法印と号する僧ありけり。たび／＼強盜にあひたるゆゑに、この名をつけにけるとぞ。
(第四六段)

よき細工は、少しにぶき刀をつかふといふ。妙観が刀はいたくたゞず。
(第二一九段)

などの、さまざまな寓意や含蓄のありげな（読み方について説の分れやすい）、本書の中に実に随処に見られる玉虫色の表現が早くもここに示されているようである。

この種の一筆書きに似た短文とは別に、兼好の本領とする表現

に、話題をひとしきり広げて見せる方法がある。人間（実質的には貴族社会の男性）として生れたものが願う諸条件を挙げる第一段以来あちこちでくりかえされるものである。無駄な言葉や身ぶりの大きな言いまわしは使わないが、必要なことだけは、一つ一つだめを押すように言及し、当面手がける領域について丹念な目配りを見せつつ、先に進んでいく。それをたどる者の心には、よく整序された簡条書きが与えるのに似た快感が残る。そういう兼好の思考法と文体の特徴も、序段に早くも見て取れるようである。ここには、いかなる時に（つれづれなるまゝに、日暮らし）、何を（心にうつりゆくよしなし事を）、どんなふう（そこはかとなく）書いたものか、書くことによって作者がいかなる心境を持つに至ったか（あやしくこそものぐるほしけれ）が手短かに語られている。わずか七十余字の中によくもこれだけのものを盛りこむことができたものと、文章表現に少しでも苦勞したことがある者ならば、舌を巻かずにはいられないであらう。

結果的には、この序文は、以下始まる作品世界そのもののばかりでなく、後世続出する随筆文学を先導することになる。随筆は、王朝期に『枕草子』という前例があり、その萌芽は先行書のあちこちに見られたが、その存在証明は、この徒然草の中ではじめて文章化されたのである。随筆とは何かを考えると、人はこの序文を思い出すはずだが、特に「そこはかとなく」の部分を心にとどめ、そこから思索が始まったり、逆にとどこおったりすることとなる。徒然草の文体なるものを考える場合も同様である。

文体の多様さ

「そこはか」とは「其処は彼」で、「対象となる事がら、状態を分

明に指定する意」という（『岩波古語辞典』）。「そこはかとなし」はその否定形だから、「分明に指定」できない物事の謂である。みずからの著述についてこの語で評するのは、

思ひ出づるに任せて、和漢の事、古今の物語、そこはかとなき
しなじなを、書き置き侍り。
（『沙石集』跋文）

のような例もあり、謙辞として常套に属するものであらう。しかし、「そこはかとなく」執筆したというのは、この徒然草の特性をよく示したものであるべく、たしかにこれは、それが何であるかを「分明に指定」できない作品である。

第一段の冒頭の語は「いでや」という感動詞であるが、これは、いぶかり、ためらいなどの口吻を示す会話語である。従って徒然草は、困惑の表情を見せる作者のくだけた雑談調によって始まるわけである。二百四十三の章段にわたって語られる話題は、連想による心理的脈絡らしきものはあるが、飛躍が多く、雑然としている。人性論があり、趣味にふれる主張があり、説話や追想があり、故実を伝える断片的聞書があり、いかにも遁世者のものらしい発心、遁世への主張がありというふうで、それらを分類しようとする、前記のような玉虫色の気配が多少とも各段にあつて、単純な意味付けはむずかしく、あきらめざるをえないことになる（そのむずかしさは、諸家が行った分類が千差万別なことに示されている）。

意図・主題・方法などが特定されているならば、それにふさわしい文体も選ばれよう。事実、誰が見ても説話的章段としか思えないものは説話に、物づくしの段は『枕草子』に、否定の論理を展開する硬質な段は仮名法語に、それぞれ文体上の類縁が求められる。その他、諸段とそれぞれの関連領域との対応関係を並べたてるのは容易で、言及される範囲はほとんどの既成ジャンルにわたるであら

う。

徒然草のこのような多彩さは何の結果なのだろうか。多分に輓晦を含んでの言と思われる「そこはかとなく書きつくれば」には、自己にふさわしい表現の型を模索すべく、まず表現者としての適応能力をはかりつつ各種各様の文例集を作っている兼好の姿も思い浮ぶのである。

しかし、その試みによって得られたものを示す証拠らしきものはない。徒然草の成立事情はいまなお（というより、ますます）はっきりしないが、その大部分は元徳二年（一二三〇）から翌年にかけて書かれたと考えられており、兼好にはなお約二十年の余生があったわけである。にもかかわらず、その後の彼に多少ともまとまった著述があった形跡はない。また、兼好は徒然草を称して「あぢきなきさび」（第一九段）とするが、これに先立って腰をすえて書いた、当時の知識人としていわば本業に属する文章も残していない。徒然草以外にわれわれの知る兼好の作品は、多年に及ぶ和歌約三百首を集めた家集一卷と、これに洩れた若干の詠歌に尽きている。兼好と対照される長明は、『方丈記』に加えて紀行『伊勢記』、歌書『無名抄』、説話集『発心集』などを、いかにもそれぞれにふさわしい書き方で作品化した。資質、蓄積、それに余暇、どれをとっても彼にまさるとも劣らない兼好の寡作はいぶかしいが、用いた小さな余白の多彩なひろがりもすこぶる異例とすべきであろう。

徒然草の文体を考えるとき、その多彩さを丹念にたどること、作品世界の中に一貫するものを掘りおこすことが必要になる。限られた紙幅の中ではもちろん、典型的なものを示して他を類推させるというかたちでしか論じえないが、徒然草ほど、そのような操作がむずかしいものはあるまい。当面わたくしもそのむずかしさにた

じろがざるをえないが、まず、他に類例を求めがたいものを見ることから始めたい。

第二段

同じ心ならんと、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まんこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、露遣はざらんと向ひるたらんは、ひとりあるこゝちやせん。

互ひに言はんほどの事をば、「げに」と聞くかひあるものから、いさゝか違ふ所もあらん人こそ、「我はさやは思ふ」など争ひ憎み、「さるから、さぞ」ともうち語らば、つれ／＼慰めと思へど、げには、少しかこつかたも、我と等しからざらん人は、大方のよしなしごと言はんほどこそあらめ、まめやかの心の友には、はるかにへだたる所のありぬべきぞ、わびしきや。

（第二段）

文末に「や」を持つ段が徒然草には十三あり（三巻本『枕草子』には、全二百九十八段中五段）、その大部分は疑問ないし反語で、本書の批評性を示す基調をかたちづけているようであるが、この段のみは詠嘆の「や」で終っている。しかも、それが主情的な「わびし」と接続しているために、兼好の無量の思いを伝えて印象が深い。特に、この「わびしさ」を彼と共有する人にとっては胸にせまるものがある段で一読忘れがたいものが残ろう。

しかし、その印象には何かとりとめない感じがなくてもない。この段、ことに後半が、文脈にそって一語一句の意味するところを容易にたどれないためであろう。徒然草の文章は、一般に平易・明快と思われがちであるが、舌足らずな箇所が少なくない。読み方にっ

いて諸説が分れたり、おびたらしい語句を補った口語訳が行われ
たりするゆえんである。第一二段はその弊が目立つものの一つで、
原文に倍する字数（平常の場合は、原文の字数の二、三割ましであ
るう）をついやして通釈をほどこした橋純一のごときは、この段に
ついて「徒然草中難解の章である」と評し、「多くの中等国語読本
中に採られてゐるのは不思議なことである」としているほどであ
る。

この「難解さ」の原因は、一つに文の長さにあるう。何しろこれ
は全体で二つの文から成るにすぎず、しかも、主語（主部）と目さ
れる部分が長い。第一文の前半は、「うれしかるべき」をみちびく
主語が「同じ心」から「いひ慰まんこそ」であり、第二文のはじめ
に至っては、「互ひに」から「あらん」までが「人」にかかり、そ
の句が後の「つれ／＼慰まめ」の主語となり、中間には二つの言辭
の引用を含む条件句が挿入されているというわけで、それを目で追
つていけば了解はつくが、耳からこの文章が入ってきたならばたち
まち不得要領な思ひを抱かざるをえない。以下の部分はますますわ
かりにくく、第一、「少しかこつかたも」とは何のことがはつき
りしない。すぐ下にかかるとするのが通説だが、言いさしの形と考
えてここで文を切るとする説、後の「はるかにへだゝる」にかかる
とする説などもあり、どれによつてもすっきりした解は得られな
い。「少しかこつかた」が、「互ひに言はんほどの事」や「大方のよ
しなしごと」とどうかかわるのかなどと考えていくとますますとり
とめなくなっていくのである。

そのとりとめのなさの原因のもう一つは、いわゆる推量の助動詞
「む（ん）」の多用にあるう。この約三百字にすぎない短文の中に、
実に十一回にわたって「む」が現われ、文の長さといひまて綿々

とした調子を形成しているが、特に連体修飾句に七回登場するのが
目を引く。この種の「む」は、婉曲ないし仮定の機能を持つとさ
れ、「む」から「う」に至る変化の中に衰退してしまつたものであ
る。冒頭の「同じ心ならん人」とは、「同じ心といえはいえるよう
な人」とも、「同じ心の人がかりにいる」として、その人」とも
訳せるが、要するに、「同じ心ならん人」と「同じ心なる人」とは
微妙に、または決定的に違うものである。同じようなことは、他の
六例についても言いうると思われる。兼好は、くどいほどにこの
「む」をくりかえしつゝ、仮想に仮想を重ね、得られそう得られ
ない友との十全な関係を悲観的に思い描いてこの段を綴っている
であらう。

これを、同じく悲観的な趣旨をのべる『方丈記』の、

それ、人の友とあるものは、富めるをたふとみ、ねむごろなる
を先とす。必ずしも、情けあると、すなはなるとをば愛せず。

ただ、絲竹・花月を友とせんにはしき。

あたりと比べれば、その「難解さ」はますますきわだつてであらう。
長明は、有無を言わせぬかたちで、「友」などというものがありえ
ぬ現実とそれへの対し方を簡潔にさし示すが、兼好は、絶望と未練
の間をたゆたい、その筆は読者への配慮に乏しく、ほとんどひとり
ごとのように自閉的である。

もちろん、この差異は、二者の価値の多寡を意味しまい。長明の
言は、少なくともこの部分については武斷的にすぎて余韻に乏し
く、悪文に属するかもしれない第一二段にはしたたかな実感があ
り、喚起力においてむしろまさっているかとも思われる。

やや完成度の低い表現にもかかわらず、そのような思ひを抱かせ
るのは、兼好自身の体験の深刻さにもよろうが、この段を書くとき